

中等部第1回

# 国語

平成24年2月1日実施

50分

2012年度

## 〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕・〔二〕があります。
  - 二、解答時間は五十分です。
  - 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。  
キリトリ線より切りはなしてください。
  - 四、問題用紙・解答用紙の所定のところに書いてください。
- 四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。

| 受験番号 | 氏名 |
|------|----|
|      |    |

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校を卒業した翌日、北斗は自転車旅行に出発した。初日から毎日百キロずつ走り、五日目には、この旅の相談相手でもあった、父親（昇平）の友人（伸男）の住む大阪おおさかに着く計画である。昇平は、北斗が自転車で走るコースを車で走り、時々合流し、北斗の旅をサポートしている。北斗は一日目の旅の目標を達成し、昇平とともに二日目の朝をむか迎えた。

「とにかく朝飯でも食えよ」昇平は車からアウトドア用のテーブルセットを出した。「母さんのおにぎり、今日食べてもうまかったし、オレンジジュースもあるぞ」

ジュースの方は今朝手に入ったものだった。車を止めた近くに果樹園の看板が出ていたので、連絡先れんらくに電話して事情を話したのだ。※人の土地に勝手に泊とまったあげくの事後ホウコク（a）みたいなものだったが、果樹園のオーナー夫人は笑ってユル（b）してくれて、わざわざ飲み物の差し入れにしてくれた。農作業の時に使うという、果樹園の奥おくの簡易トイレの場所まで教えてくれたのである。

その場所を教えてやると、北斗はまずトイレに向かった。――歩いていく後ろ姿が妙にぎくしゃくしているのは筋肉痛だろう。どう見たって、今日これから峠越えとうげこをして百キロ走れる状態ではなさそうだった。

自分でもそれが分かるのだろうか。トイレから戻もどってくる時、北斗はやけにシンコク（c）な顔をしていた。昇平はそこにジュースの缶かんを突き出す。

「こいでとれた百パーセントオレンジジュースだつてさ」

① 北斗は困った顔のままぐくぐくと飲み始めた。昇平は昨夜からのことを大雑把に説明し、伸男が電話で出産の連絡をしてくれたことも話した。

「俺たちが会いに行ってもいいらしいから、生まれたばっかの赤ちゃんに会いに行けるぞ」

「うん……」

無事に生まれたというおめでたい話なのに、北斗の表情はどうも晴れない。昇平は思い切って核心に切り込んだ。②

「今日のゴールは宇津ノ谷峠だ。今すぐ出発したって、日が暮れるまでに辿り着けると思えるか？」

「……………」

(d) ただでさえ二日目のコースはきつめにセッテイされている。出発してすぐにヒルクライムとなり、標高六百二十メートルの熱海峠が待っているのだ。そこを越えてもしばらくは山岳コースだし、どうにか駿河湾まで下つてもその後の距離が長い。そしてゴールが宇津ノ谷峠ということは、一日走って疲れ切った最後にもまたヒルクライムが待っているのだ。一日目の疲れが残っている上、寝坊で走れる時間も短くなっていることを思えば、とても完走はできそうにない。一日目のコースを走り抜いた北斗にはそれがよく分かっているはずだった。

③ だからだろうか。北斗はじつと下唇を噛みしめて、自分から口を開こうとはしない。根比べみたいな沈黙が続いた後、昇平は優しく語りかけた。

「俺たちはどっちも、少し冒険つてもんを甘く見てたんじゃないかな」

北斗が視線を上げた。昇平の口調にかえって不穏なものを感じたようだ。

※ 「北斗は宇宙まで走るって目標は果たしたけど、その後の疲れを甘く見てたから寝坊した。それに野宿つてもんを甘く見てたから自転車泥棒にもあったし、危ない真似まですることになった」

北斗が何か言い返そうとする。昇平はその前に自分の落ち度も認めた。(あ)

「父さんがスピード違反やら何やらで遅れたのも、サポーターつてもんを甘く見てたからだ。北斗の冒険を認めて手伝おうって思ってたくせに、熱海まで走るだけでもこんなに疲れが残るってことを読みきれてなかったのも、考えが甘かったと思うよ」

「……………」

「だからさ、冒険を諦めるんじゃないくて、再チャレンジってことにしないか？」

「再チャレンジ？」

「そりゃ。態勢を立て直すんだ。もつとしつかり準備して、絶対走りきれぬぞってくらい鍛えてから、もう一度今回のコースに挑めばいいじゃないか」

「もう一度って……いつ？」

「そりゃあ分かんないけど、ゴールデンウィークとか夏休みとか、いろいろあるだろ。お前が中学に入ってからスケジュール次第だよ」

「そんな時にはまた母さんが反対するかもしれないじゃないか」

「その時には絶対に説得してやる。父さんもサポーター車で失敗しないように練習しとく。だから北斗は、一日目に百キロ走った次の日も平気で早起きしてまた百キロ走れるくらいの体力をつけとくんのだ」

「……いつか再チャレンジするから、今日走るのは諦めろってこと？」

「そうだな。これから出発して東名高速にのれば、夜までには余裕で大阪に着けるぞ」

そのことについて、北斗はしばらく考えていた。そしてぽつりと呟いた。

「……僕は、まだ走れるよ」

「でもお前、筋肉痛がひどいだろ？ 歩くのだって、大変そうだったじゃないか。その調子じゃ峠越えだって——」

「それでも、まだ走れる」

「これから走り出しても、日が暮れるまでに宇津ノ谷峠は無理だ。チェックポイントまで辿り着けなかったらリタイアするのは、お前が言い出したんだぞ」

「でも、まだ日は暮れてない」北斗は空を指さした。「だから、たとえリタイアだって、今日は走りたい。行けるとこまで行ってみよう」

「……………」

今度は昇平が黙る番だった。北斗の言葉に、ふつと既視感を抱いたのだ。

行けるところまで行ってみよう。——かつて昇平も、そう思ったことがある。いつのことだったろう。初めて海まで走った時か、喧嘩して家出した時か、実家から上京した時か——自転車で思い切り走る時、頭の片隅にはいつもそんな思いがあった気もする。

北斗がずっと抱いていたのも、実はそんなシンプルな思いだったのかもしれない。行けるところまで行ってみようという願望が、北斗の中で冒険という言葉になった。だから冒険の終わりは寝坊の後で昇平から告げられるのではなく、力いっぱい走りきった後でやってこなくてはならないのだろう。

「……分かった。じゃあ今日は走れるだけ走ろう。父さんもしつかり伴走するから」

④ 昇平がうなずくと、北斗もしつかりうなずいた。

「その代わり、約束は約束だ。日が暮れるまでに宇津ノ谷峠の道の駅※まで着いてなかったら、リタイアだ。今夜はまた車

で寝て、明日大阪まで行く。今回の冒険はおしまいで、伸男と美園さんにおイワイを言いに行く。それでいいな」

「うん、いいよ」

北斗の中でも何か吹っ切れたようだった。たとえば筋肉痛だって、これから思い切り走ることだろう。それが昇平には頼もしく思えた。

多分、北斗にはまだ挫折を受け入れる準備ができていなかったのだ。今日一日きついコースを思い切り走れば、嫌でもそれと向かい合うことになる。⑤ まだ走れるという思いが消えた時、北斗の中には何かが生まれるはずだった。

(竹内真『自転車冒険記 12歳の助走』河出書房新社)

※人の土地に勝手に泊まった……昨夜、昇平は高台の果樹園の脇にあった車止めのスペースに車を止め、北斗と車内に泊まった。

※ヒルクライム……山道や丘などの上り坂。

※宇宙まで走るって目標……北斗は、地球から宇宙までの距離と同じ百キロを、旅の期間中毎日走ること目標にしていた。

※既視感……それまでに一度も経験したことがないのに、かつて経験したことがあるように感じる事。

※道の駅……道路にもうけられている、ドライバーのための休憩所。

問一 線部 (a) (e) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部①「北斗は困った顔のままぐくぐくと飲み始めた。」とありますが、北斗が「困った顔」をしているのはなぜだと考えられますか。三十五字以内で答えなさい。

問三 ———線部②「昇平は思い切って核心に切り込んだ。」とありますが、ここで昇平が北斗にもっとも伝えたいことは、どのようなことですか。その内容について北斗が表現している部分を、本文中の会話の中から二十五字以内で探し、抜き出して答えなさい。

問四 ———線部③「北斗はじつと下唇を噛みしめて、自分から口を開こうとはしない。」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次の中からもっとも適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 完走できそうにないことは身にしみて分かるが、それだけにたまらなくやしく、ここでリタイアすることを自分が言い出すことに大きな抵抗があるから。
- イ 完走できないことは明らかであるが、疲れ切っているので口もききたくなく、これからどうしたらよいかを昇平が言ってくれないかと思っているから。
- ウ 昇平の言うように完走できそうにないとは思いますが、人に言われたことがしゃくにさわり、それを認める言葉をすなおに返すことができないから。
- エ 完走できないことははじめから分かり切っていたが、やはり本当にできないということがはずかしくみじめで、もうどうとでもなれと思っているから。
- オ 完走できそうにないことははっきりしているが、その原因を作った昇平ではなく、自分の方ができないと言わなければならないことが納得できないから。

問五 ~~~~~線部(あ)「落ち度」・(い)「吹っ切れた」の意味としてもっとも適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(あ) 落ち度

- ア あやまち                   イ 短所                   ウ 不正                   エ 無知                   オ 野心

(い) 吹っ切れた

- ア 諦めて思いを断ち切った                   イ 集中がとぎれどうでもよくなった
- ウ 向き合って状況を理解した                   エ 心のつかえがとれてすっきりした
- オ 関心がなくなりこだわらなくなった

問六 ———線部④「昇平がうなずくと、北斗もしっかりうなずいた。」とありますが、ここでは北斗は昇平の言葉をすなおに受けとめています。それはなぜだと考えられますか。本文中の言葉を用いて、六十字以内で答えなさい。

問七 ———線部⑤「まだ走れるという思いが消えた時、北斗の中には何かが生まれるはずだった。」とありますが、昇平が「北斗の中に」「生まれるはずだ」としている「何か」とはどのようなものだと考えられますか。次の中からもっとも適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 挫折を見つめたうえで謙虚に行動する姿勢。
- イ 挫折を経験したうえでの自信と達成感。
- ウ 挫折を経たうえでの無理をしない生き方。
- エ 挫折を味わったうえでの意地と負けん気。
- オ 挫折を知ったうえで本気でやりぬく意欲。

問八 昇平は、どのような父親として描かれていますか。次の中からもっとも適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 子どもを大切に思っているが、自分の本当の考えをはっきりとした強い言い方では伝えず、子どもに意見を求めて好きなようにさせ、いつもあれこれと気をつかっている父親。

イ 子どもの夢を実現させたい一心で励ます結果、気持ちに立ち入りすぎて自由な行動を妨げてしまうこともあるが、教育熱心で、子どもを将来に向けて強く引っ張っていく父親。

ウ 子どものそばにいて必要な助言や手助けはするが、すべきことは子ども自身に考えさせ決断させるなど、自律することをうながしながら自主性を尊重し成長を見守っている父親。

エ 子どもを一人前に扱い信頼関係を築いているが、自分と対等なものにとらえているため、まちがった判断をしてもとがめだてせず、本人に任せるのが一番だと考えている父親。

オ 子どもに目標を達成してほしいが、困難に出あいながらもがんばっている姿を黙って見ていられず、声をかけては自分も考え直すなど、子どもとともに自立しようとしている父親。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 江戸時代まで日本語の「自然」には、自然にそうなるという意味しかありませんでした。自然環境という意味はまったく含まれていなかったのです。これは nature の翻訳語として、新たに付け加えられた意味なのです。しかし、どうしてこんなに自然がいつぱいの国なのに、自然という言葉がなかったのでしょうか。江戸時代までは、自然はどう呼ばれていたのでしょうか。

私たちが「自然」と口に出すときには、その自然に自分（人間）は含まれていませんね。人間以外を自然と言うのです。つまり自然と言うときには私たちは、自然の外に出て、外から自然を見ているのです。それに対して、江戸時代までの日本人は、自然の中に生きていて、自然と自分（人間）を分けませんでした。これを池のフナにたとえてみると、よくわかるでしょう。池の中に住んでいるフナには、池の中のことはすみずみまで知っていますが、池の外形は見えません。ところが、あるとき池の岸に登ってしまったフナには、はじめて自分が住んでいる池の概要が見えたのです。「そうか、こんな丸い池に住んでいたのか」というような感じですよ。

この池を「自然」という言葉に置きかえてみてください。池の中のフナは、ほかの魚や生きもの、水草や水そのものの名はよく呼んでいたでしょうが、池という言葉を使うことはなかったでしょう。自然と一体になることは、私たちちがって容易だったのです。一方、現代の日本人は、自然を外から眺めることに慣れてしまいました。人間と自然とのあいだに垣根ができてしまったと言ってもいいでしょう。

さて、輸入語としての「自然」はもう一つの性格をもっていました。それは、人間以外を自然と言うことになると、人間からいけばん遠い、人間の影響を受けていない自然がもっとも自然らしい自然ということになるのです。現実に

自然の中でいちばん価値があるのは、<sup>※</sup>人為がおよんでいない「原生自然」だという常識が定着しています。世界自然遺産のひとつが、原生自然かそれに近い状態の場所です。<sup>②</sup>なぜ、人為が加わった自然は価値が落ちるのでしょうか。そのへんの田んぼが貴重な自然だという意識は、ほとんどありません。

西洋では原生自然は、神が創造したままの自然が残っているもので、神の神意に触れることができるから価値があるのだそうです。それは一つの考え方として、筋が通っているとは思いますが、日本の伝統的な世界観では受け入れにくい考え方です。そこで、人為による攪乱<sup>※</sup>がない「自然な」状態だからという日本の文化に寄り添うような説得がおこなわれています。

日本人が「自然」という言葉が好きなのは、「自然にそうなる」という意味が、<sup>※</sup>ままならぬ人間の生き方の手本とされてきたからでしょう。このように私たちが使用するようになった「自然（環境）」という言葉は、「自然に、自然な、自然のままに」という伝統的な日本語の意味が合流しているからこそ、魅力的なのです。しかし、ここに大きな問題が隠<sup>かく</sup>されているのです。

#### （中略）

もう一度、農業が自然破壊<sup>かい</sup>かどうかを考えてみましょう。私たちはいつのまにか、「自然」と言うときには人間を含めていません。人間は自然ではないと思ひこんでいます。それは明治時代以降、西洋からもちこまれた、日本人にとっては新しい輸入語で、しかも輸入思想であつたことは、すでに説明しました。この結果、人間の行為も完全に自然ではないことになりました。百姓<sup>ひやくしやう</sup>仕事も人為ですから、自然に対する破壊だという考え方も生まれました。

そうすると、説明できないことがいっぱい生じてきます。田んぼは人為で開かれて、<sup>※</sup>造成されたところですから、自然ではないということになります。しかし、その田んぼで、身近な生きものの多くが生まれ育っていることは、

<sup>※</sup>七〇ページの表3・2でも明らかです。

これらの生きものは、自然の生きものではないのでしょうか。「たまたま、しかたがなく自然の生きものが、人工的な田んぼの中に移住しているだけだ」という言い分を認めることにしましょう。それなら、その状態が二〇〇年以上もつづいてきても、あくまでも人工的な場所に自然の生きものが仮住まいしていると言いつけなければならぬのですか、と質問したくなります。さすがにこれには答えられないでしょう。そこで「田んぼも自然の中に入れてやってもいいけれど、人為が加わって、本来の自然を失った二次的な自然だということにしましょう」と提案されています。

<sup>③</sup>しかし、これにも私は納得<sup>なつ</sup>できないので、反論しています。百姓の手入れがおこなわれている自然（二次的自然）と、人為が加わらないままの原生自然を、なぜ区別しないといけないのでしょうか。なぜなら、私の村には原生自然などまったくなく、私は一生のうちたぶん一度もそういう原生自然に触れることはないでしょう。そうすると私は、ほんとうの自然（原生自然）を知らないまま、自然について話したり、自然は大事にして守らないといけないと主張したりしていることになります。つまり、私が念頭にいつも浮かべている自然とは、狭い、小さな、局所的なものなのではないか。そうではないと思います。

つまり、私は自然を村の内側から見えています。自然の一員として、人間と自然を分離<sup>り</sup>せずに見えています。それに対して、自然の外から見ると、原生自然と二次的な自然の区別もできるのです。私たちが話題にしている自然とは、ほとんどが外側から見ると二次的な自然ですが、それは内側から見ると自然そのものです。わざわざ二次的な自然と断る理由は、原生自然を理想的なモデルにしたいという魂胆<sup>こんたん</sup>が（価値観が）外側からの見方にはあるからでしょう。百姓はこれが受け入れられないのです。

<sup>⑤</sup>赤トンボを例にして説明しましょう。日本で育っている赤トンボは多めに見積<sup>ひき</sup>もると、約二〇〇億匹です。私はい

ともかんたんに言っていますが、こういう数字を出すには相当苦勞したのです。問題はそのうち、田んぼで生まれているのが九九%だということです。赤トンボは、西日本ではウスバキトンボという種類が主ですし、東日本ではアカネが主です。言いたいことは単純明快です。赤トンボに関しては、百姓仕事という人為こそが、赤トンボという自然を支えているのです。人間（人為）と赤トンボ（自然）は分離できません。

百姓仕事という人為によって生まれ、つづいて田んぼという世界は、十分に自然です。なぜなら、現代社会にとってもっとも重要な自然は、人間のかかわりがふだんに問われ、ふだんに見直され、格段の努力を注がなければ守れない世界がほとんどだからです。田んぼという自然も守れなければ、原生自然も守れないでしょう。田んぼは少なくとも日本では最大の自然です。人為である百姓仕事を引きつづきおこなわれており、その成果が、もっとも見えやすい世界としては、森林の比ではありません。そういう意味で、日本最大の身近な自然なのです。

人間との関係によって変化する自然だからこそ、私たち人間の役割を自覚して暮らすことが、新しい自然のとりえ方です。

（宇根 豊『農は過去と未来をつなぐ 田んぼから考えたこと』岩波ジュニア新書）

※翻訳……ある言語で表現された文を他の言語に移し変えて表すこと。

※概要……おおよそ。

※人為……人間のしわざ。自然のままではなく、人手を加えること。

※世界観……世界とそこに生きる人間の本質・意義・価値などについての全体的な考え方。

※攪乱……かき乱すこと。

※ままならぬ……思い通りにならない。

※造成……手を加えて利用できるように作り上げること。

※七〇ページの表3・2……田んぼの生きものの指標（めじるし）として二三〇種の動物があげられている。

※ふだんに……絶えず。

問一——線部①「江戸時代まで日本語の『自然』」には、自然にそうなるという意味しかありませんでした。自然

環境<sup>かん</sup>という意味はまったく含まれていなかったのです。」とありますが、明治時代以降「自然」という言葉に「自然環境」という意味が付け加えられた理由を、筆者はどのように考えていますか。江戸時代まではその意味がなかった理由とあわせて説明しなさい。

問二——線部②「なぜ、人為<sup>い</sup>が加わった自然は価値が落ちるのでしょうか。」とありますが、日本人が「人為が

およんでいない自然」を価値があるものとするのはなぜだと筆者は考えていますか。次の中からもっとも適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア「自然」という言葉に「自然環境」という意味が加わったとき、自然の中で一番価値があるのは人為がおよんでいない原生自然であるという常識が生まれたから。

イ「自然（環境）」という言葉は、日本人が人間の生き方の手本としてきた「自然にそうなる、自然のままに」という伝統的な日本語の意味をあわせもっているから。

ウ 原生自然には、神が創造したままの自然が残っているため、神の神意に触れることができる点が、「自然」という言葉が本来もっている意味とぴったり合っているから。

エ 日本の文化では、すべてにおいて「自然な」状態であるものに価値をおいているため、神が創造したままの姿を残しているものが、なにより美しく感じるから。

オ「自然」とは、人為がおよんでいない、神が創造したままのものである、という世界共通の価値観によつ

て、世界自然遺産に認定されるかどうかが決定されるから。

### 問三

——線部③「これにも私は納得できないので、反論しています。」とありますが、筆者は現代において二次的自然と原生自然が区別されるのはなぜだと述べていますか。筆者の自然の見方と対比させる形で説明しなさい。

### 問四

——線部④「これ」とありますが、その示す内容を、この段落中の言葉を用いて「こと」の形で十五字以内で答えなさい。

### 問五

——線部⑤「赤トンボを例にして」とありますが、この赤トンボの例を通して筆者が述べているのはどのようなことですか。次の中からもっとも適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 赤トンボが現在どれほど多く生息しているかを述べて、赤トンボをはぐくむ自然そのものを大切にしていかなければ、その数が減少していつてしまうという危険性を述べている。

イ いかに多くの赤トンボが田んぼで生まれ育っているかという例を通して、田んぼという自然を軽く見る現代人の意識に疑問を投げかけ、田んぼを大切にすべきであると述べている。

ウ 人間とのかかわりによって自然は守られていくことを述べ、人間と自然は分離できないものであり、人為が加わっていてもそうでなくても、すべて同じ、守っていくべき自然であると述べている。

エ 人為が加わることによって自然は少しずつ破壊されていくものであるから、人為が加わっている自然とそうでない自然を分離して考え、それぞれに適した方法で守っていくべきだと述べている。

オ 赤トンボは田んぼという自然の中ではぐくまれているという主張は自分だけの考えであるから、この考えを田んぼを自然とみなさない現代人の意識に浸透させていかなければならないと述べている。

### 問六

この文章について述べている次の文の中から、適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 輸入語としての「自然」という言葉が持つ意味を通して、人間と自然にへだたりが生まれてしまったという現代の状況をとらえ、自然とどのように暮らしていくべきかを主張している。

イ 江戸時代までと明治時代以降で変わってしまった自然に対する意識を問題として、その変化を否定しながら、江戸時代までの意識にもどるべきであると主張している。

ウ 池のフナや赤トンボという具体例を通して、「自然」という抽象的な言葉が持つ意味を、現代人がもう一度考え直すきっかけとなるように構成している。

エ 現代の「自然」という言葉が持つ意味を考えながら、人為によって生まれる田んぼという自然がどれほど大切に守っていくべきものであるかを主張している。

オ 江戸時代までと明治時代以降、西洋と日本をそれぞれ対比させることで、日本人の自然に対する見方を明確にし、その価値観の重要性をわかりやすく読者に伝えるように工夫している。

|      |  |
|------|--|
| 総 点  |  |
| 科 目  |  |
| 国 語  |  |
| 受験番号 |  |
| 氏 名  |  |

$$[-]$$

| 問七 | 問六 |    |     | 問四 | 問三 | 問二 | 問一  |
|----|----|----|-----|----|----|----|-----|
|    |    |    |     |    |    |    | (a) |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
| 問八 |    |    | 問五  |    |    |    | (b) |
|    |    |    | (あ) |    |    |    |     |
|    |    |    |     | 25 |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    | し   |
|    |    |    | (い) |    |    |    | (c) |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    | (d) |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    | (e) |
|    |    |    |     |    |    | 35 |     |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    | い   |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
|    |    |    |     |    |    |    |     |
| 60 | 40 | 20 |     |    | 20 | 20 |     |

$$\left[ \begin{array}{c} \text{---} \\ \text{---} \end{array} \right]$$
[illegible]